

一ミ筆追記したいのは、既に五年以前に豫報せられた英國巴利聖典協會のステード氏等が編纂しつゝある筈の

同様の名の辭書のこゝである。我等は、久しく學界がこの出版に心を繫けてゐたこゝ、而して右ステード氏の豫約に對して異常なる期待をかけてゐたこゝをよく知つてゐる。然るに今我が學界から彼に先んじて本書の出現を見たこゝは、著者の辛勞を謝する前に先づ我學界自らの誇りとして慶すべきこゝではあるまいか。評者は何がなし、この祝福すべき大出版に當面して我が學界に到來せる黎明の曙光に眩惑せずにはゐられない。恐らく本辭書が我が學界に對して投げかけかける暗示に富んだ呼聲（上記の内容）は、必ずや遠からぬ將來に於て各種の新

研究を助産せしめて、我等が憬がる、近代佛教學の大成の日を近づかしむるこゝであらう。



本書は四六版八百頁を細字の而も困難な字句によつて盛りこんだ大冊である。それだけに出版者としても印刷者としても多大の犠牲を承知の上で引受けた大事業である。いふのも當然なこゝである。従つて定價も二十五圓にふりつけた。いふこゝも無理からぬこゝではあるが、しかし初版は百六十頁宛の五分冊として刊行し、五分冊で十六圓の特價（初分冊四圓後四冊參圓宛）で頒布する。いふから、學生等の購買力にもふさはしい。

印度佛教固有名詞辭典に就て

西 尾 京 雄

一、本辭典の地位、日本に於ける佛教學の研究はこゝ、

四五十年以來、泰西學者の研究の影響をうけてその進歩

の加速度に加はりつゝあるを見る。然しながら、最も研究の基礎となる辭典に關する出版のないことは如何なる事情によるのであらうか、漸く、東京、大正大學に於て萩原博士を中心とする梵語の諸學匠によつて梵語辭典の編纂を企て著手しつゝあるを報じてゐる。

紀元、一八七五年、ロバート、シーザー、チルダース (Robert Caesar Childers) 氏が不朽の功業である「パリー字典」(A Dictionary of the pali Language) を出版し斯界に貢獻したのであるが、此の辭典中にはバーリ語の固有名詞を缺き、其の後一九二五年、リス・デキズ (Rhys Davids) 博士シウイリアム・ステード (William Stede) 兩氏の著である Pali-English Dictionary を、ロンドン、バーリ、テキスト、ソサイティより出版したのであるが、これにも亦、固有名詞が省かれてゐる。而してその後記に於て、ステード氏は固有名詞研究の必要なることを力説し、A Dictionary of names の編纂の計畫あり、既に、リス・デキズ氏と共に莫大なる史料の集積あることを報じてゐる。是に先つて、Pali-English Dictio-

印度佛教固有名詞辭典に就て

nary の編纂に助力を與へてゐるステン・コナー (Sten Konow) 氏によつて Journal Pali Text Society, 1907 には「Hを以つて初まつてゐる語」及び、1909 には「Sを以つて初まつてゐる語」を掲載してあるが、これには極く簡単に固有名詞が出してある。又、トレンクネル (V. Trenkner) 氏の没後、アンデルゼン (Dines Andersen) ミス (Helmer Smith) 兩氏その後をうけて校訂、出版しつゝある A critical Pali Dictionary は一九二六年第一冊一九二九年第二冊(共に未だ a の部) を、コペンハーゲンより既に出版したのであるが、是には固有名詞を擧げてゐる。其の完成の暁には學界を裨益する所偉大なるものがあるであらう。一方、日本の佛教學界に於ても、三、四の有力なる佛教辭典あり、其處には相當の固有名詞もあるにはある。

然しながら、前者の泰西學者の固有名詞に關する業績は未だ問題とする程の量もなく、又、それが佛教に關するものである限り、何人にとりても漢譯、佛典の材料の缺けて居ることは少なくして日本の佛教學者の渴を醫し得

ないし、又、其の價值を減するであらう。後者の其等には廣くバーリの諸典籍、並に梵語の諸材料の缺けてゐることは泰西學者の満足をかち得ることは不可能であり、學的價值もそれだけ低いものとなるであらう。

是等の學界の狀勢にあつて、兩者の固有名詞に關する成果の缺點を補ひ多くの要望を擔つて出版されたのが、赤沼先生の「印度佛教固有名詞辭典」〔原始期篇〕である。その名の示すが如く、地名、寺院名、窟名、天神、鬼靈名、及び人名等、悉く網羅されてゐるから、佛教研究者には便利此の上もなく、學界に貢獻するこゝ偉大なるものがあらう。

二、固有名詞辭典の特徴の種々、(a)、各項目、殊に人名に於て歴史的(傳記的)方法によつて敘述されてゐるこゝ。今、その説明を容易にする爲に阿難(Ānanda)の項をみるならば、第一に阿難の父母、兄弟に關する記事をあけて戸籍を示し、第二に出家、第三、入團、第四、開法第五、佛侍者時代、第六、佛滅後の教團統制時代、第七入滅の記事といふ具合に種々雜多なる史料を傳記的に配

列されてあるといふこゝである。實に、阿難の項にいたつては一八二の細目に分ち、堂々九頁に渡つて整然とかがれてゐる。然も、其等の一々の時代に就いても、史料の新旧を吟味、案配して一もゆるがせにしてはない。而して、其處に舉げられたる敘述は善く材料の中心思想を摘記してあり、全體が阿難の傳記録となつてくる。それ故に、この種の著書として、一々讀者によつて再びその丁數により如何なる記事なるかを見ねばならぬのであるが、本辭典にはその勞が讀者にこつて省かれ、簡單に如實にその傳記を知り得る便がある。然し、それだけ先生の勞には超人的のものあるこゝを知るべきである。それ故に、ある意味に於て、佛弟子傳の集大成といはれ得るであらう。

(b)、各語彙の音寫、音略、譯語等の舉示、是等の數多の提示あり、然も、著書の私見を加へて安易に訂正してなく史料のありのまゝを出されてあるこゝである。これはこれ等の史料を基礎として研究せむとする人に如何ばかりの便益を得るこゝであらうか。

(c)、出據、出典の明記、これによりて更に新たな研究をする者にこつて非常に有益であり、先生の後學に對する親切さを見るに足るであらう。

(d)、大正藏經の丁數を出して居らるゝこと。この事の特にあけるのは、先生のこの編纂あることを知つたのは、大正十年八月、實に余が大谷大學豫科二年の時であつた既に、此の時この史料の殆んど全部が出来上つてゐたのであるから、大正藏經出版以前のこゝなのである。それ故に、此の丁數を附けられたのは最近のこゝであり、先生の學的態度を知り得るゝ共に本辭典の現在學界に重き位置を加へらるゝ一條件となつてゐる。實に、本書は古き研究がそのまゝ出版されたのではなく、今日迄の成果が盛られてゐるのである。

(e)、漢譯に表はれたる異音、異名の索引を附せらるゝこと。この事はこの種の著述をして殆んど完成の域に導くであらう。

以上は、余の管見して得たる特徴の二、三を摘記したのに過ぎぬ。精しきこゝは學兄、美濃晃順氏が書かれる

印度佛教固有名詞辭典に就て

こゝと思ふ。

三、本辭典を基礎とする應用的研究、此の辭典の中、ある項目については全く研究が完成されたものゝみではない。更に、嚴密なる探究に諸多の學的成果が相俟つてより善き綜合的な説明のなされねばならぬものもあるう。

然し、今日の史料に研究成績を以つてしては、これ以上の正確さを求めることは先づ困難であらう。それゝの項目に對する史料の蒐集、整理、認定等我々後學の徒は先生に滿腔の感謝をさゝけねばならぬ。恐らく、先生にしても、此の辭典を手にならされて、師主、佛陀が菩提樹のもゝに成道したまひ、梵行已に立ち、所作已に辨ぜりこの感懷ありしが如く、なすべきこゝをなし終りりの感深きものあらうと思ふ。

若し、不完全、缺點ありせば、それは先生の責ではなく、我々後學により善くなすべく試みとして残されたものでもあらうか。

従つて、此の辭典を基礎として幾多の新研究が生れて

くるべきである。現に、先生は昭和三年の日本佛教學協會年報に發表せられたる「釋尊の四衆に就いて」の論文はその成績の一つである。釋尊の四衆、即ち、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷についての階級別地理的分布を見て釋尊教團の一部面を明にしたものである。

又、學兄、美濃晃順氏は、此の辭典中に含まれたる譯語、音寫、音略等により言語學的研究を爲しつゝあるこのことである。

其の他、多くの問題を持てる人々には、聖典文學の系統的研究方面に、或は教理史、教會史等に種々活用され得ることゝ信ずる。

四、佛敎界に於ける不朽の記念塔、以上の如き學界の狀勢によつて生れ、その特徴を持つてゐる辭典が、この日本に出版されたことは獨り先生の喜びであるばかりでなく我々日本人の誇りであるであらう。

この事業の常として、不斷の忍耐力と注意力、廣博なる知識を有するものでなくては到底完成し得るものではない。各項の分類、配合、ぎつちつかずのものゝ取捨

選擇、證定等その苦心と努力想像にあまりある。例へば *Śālistambas* の項等一九の同名異類あり、一々經典等に説明があるわけでないから、史料を區別し、證定するに如何ばかりの困難の伴つたことであらう。然るに、こゝに是等の諸難事を征服して大著述をせられしこゝは學界に對し先生の功勳の不朽なるものがある。

最後に、本辭典は五冊を以つて完成し九月第一冊配本、十月、十一月各一冊來年二月を以て完成の豫定である。敢て、佛敎に關心をもつ人々の座右にお薦めする次第である。